妹脊山四段目の思ひ出

師匠ゆづりの床本の事

竹本土佐太夫述

文樂座の三月興行で、私が「妹脊山婦女庭訓」の四段目入鹿御殿の金殿を、前狂言として勤めましたについて、思ひ出話しや所感を取交ぜて述べて見ませう。

此の狂言は、皆様も御存じの如く、道頓堀の竹本座が衰頽に向つた時、作者近松半二等が奮闘大努力の結晶として生れた名作で、趣向といひ、文章といひ、奇拔でもあり、典麗でもあり實に申し分のないよい狂言であります。古來廣く世にもてはやされて、歌舞伎の方でも盛んに上演するのも無理ではありません。大序から五段目まで、どこを研究しても味ひがあります。忠臣藏、菅原、千本櫻などと共に、十人受けのする藝題ですから、いつまでも世に倦れません。

今度は時間の都合や、時代の風尙などを參酌して三段目までを省き、杉酒屋も出さず、いきなりブツ、ケに道行を序幕として、次に鱶七の使者、姫戻りを演じ、其次に私の持場となりましたが、これは少し無理な組合せで、妹脊山の脚色をこはしてしまふ様なものであります。道行はどうしても中幕か追出しに演じたいものです。道行を出す位なら、杉酒屋から出したいやうにも思ひます。そして何といつても妹脊山は、吉野山の段が中心です。これを省くと妹脊山の精神はぬけてしまひます。併し前にも申す如く、時間の都合や興行の掛引もある事だから、強ちお仕打を非難する譯にはまゐりません。

今度南部太夫の語つた姫戻りは、若手美音の太夫の儲け役で此役で賣出す人が多いのです。私の師匠、先代大隅太夫が、春子太夫といつた時分にも、此の姫戻りで賣出しました。師匠が大家となつたのちには咽喉の工合で、語物が變つてゐましたが初めは矢張聲のよい人でありました。昔しは御簾内で語つて、シツトリと聞せたものですが、近來は出語りに致します。御見物も其方をお喜びになる様ですが、前の鱶七使者の段は、むかしから、一座の主領株が語るものとなつてをり、切の金殿を語る太夫も達物でありますから、其の中間にはさまつて中位の太

夫が姫戻りを語るには、イヤでも兩達物に謙遜して、御簾内に退却する方がよいといはれたものです。こんな事はマアどうでもよい、お客の受けさへよければよいのですが、其の御簾内で語つてヤンヤといはせる處に、妙味もあるのです。若い太夫の元氣を見せ、切尖をあらはす樣にもなるのです。そしてそこに又人形淨瑠璃の價値も妙味もあるのです。

大正五年に私が、御靈の文樂座で雛鳥と御殿を勤めました時二見の師匠(攝津大掾)から四段目の床本を貰ひました。隨分働いた本です。師匠が一興行丈け二代目越路太夫をやめて六代目春太夫を襲名し、直ぐに次興行に於て、小松宮殿下から賜つた令旨に從ひ、攝津大掾と相成りましたのが、即ち明治三十六年の五月興行でありました。此の興行から先代大隅太夫が、文樂座へ加入して、攝津大掾の改名披露の口上を勤め、自分のお目見得狂言としては、十八番の壺坂を切狂言に演じたのであります。此時の紋下は攝津大掾、豐澤廣助(五代目)吉田玉造(初代)の三人でありました。

此時の妹脊山の太夫の役割は、二段目芝六住家の掛乞がつばめ(今の古靱太夫)萬歳が叶太夫、芝六忠義が染太夫、三段目口の花渡しが文太夫(今の津太夫)切の吉野山の掛合は大判事が先代津太夫、久我之助が染太夫、定高が大掾、雛鳥が三代目越路、三味線は脊山が廣作(後に六代目廣助)妹山が五代目吉兵衛、四段目杉酒屋の口、井戸がへが源子(今の源太夫)次が三代目越路、道行が先代南部外數名、入鹿御殿の鱶七使者が先代津太夫、姫戻りが先代南部、切の竹雀が攝津大掾でありました。私のもらひました床本は、即ち此の興行にも攝翁が用ひられたものであります。又此床本は三代目氏太夫から五代目春太夫に傳はり、春太夫から二見の師匠へ讓つたのでありますから、代々の名匠の手澤がついた斯道の寶物であります。

件の床本を私に附與するに就いて、師匠は紙尾に「大正五年丙辰三月吉辰文樂座出演の際讓與す、竹本伊達太夫江、干時八十有一歳、竹本攝津大掾」と自署し、雅印を捺してくれました。又此の床本には師匠が妹脊山を語つた年度、興行日數などが記入してあります。即ち

△明治二十五年一月十九日より御靈文樂座にて十九日間極短期興行、糸廣助(五代目)

△同二十六年四月廿四日より同座にて廿九日間興行

△同三十一年三月三日より四月廿七日まで同座にて五十七日間興行、此時さの太夫(三代目越路の事)歸參、文字太夫と改名、久我之助を勤む

△同三十六年五月一日より同座に於て大入七十五日間、十四日祝儀の日帳場上る、糸吉兵衛(五代目)此興行にて御令旨拜命、此本三代目氏太夫より五代目春太夫へ傳來

△同四十一年三月一日より同座にて四十二日間興行、此時道行お三輪と二役

△同四十五年四月一日より五月五日迄三十五日間同座にて興行、前妹脊山、切湊町

と記入してあります。尤もこれは攝翁が勤めた全部ではあり

ませんが、何しろこれを見ても妹脊山が、いつも大入りであつた事が分ります（最初の明治廿五年一月興行が短期興行であつたのは何か事情があつたのです）又二見の師匠が御令旨拜受の興行にも、此の藝題を選んだのを見ても、此の狂言が如何に斯道に重んぜられてゐるかゞ分ります。つひでに二見の師匠が三十六年五月興行で、御令旨拜受の披露をした時の番附に添へビラとして發表した口上書を記してお目にかけます。即ち

襲ニ故　小松宮殿下ヨリ攝津大掾ト改名可致旨御令命ヲ蒙リ候得共、先師ノ遺命ニヨリ一先春太夫ト改名致シ候ハデハ、先師ヘ對スル情誼不相立候様申上候所、最ニ思召被下、然ラバ春太夫襲名ノ上、機ヲ見テ改名可致様御沙汰ヲ蒙リ候ニ付、此殿下ヨリ拜領ノ攝津大掾ト改名仕候儀ニ御座候、殿下御在世中、右之披露致サヾリシハ誠ニ殘念至極ニ奉存候得共致方モ無之、此上ハ拜領ノ御名ヲ穢サヾラン事ヲ念々相期シ候外無之、私ノ微衷御憫察ノ上、乍此上御負量被爲下候様奉冀上候、且此度門弟大隅太夫事、久シ振リニテ入座出勤仕候間、私同様御負量御引立ノ程併セテ奉冀上候　以上　竹本攝津大掾

さて又私個人の經歴に於て、初めて妹脊山の狂言にたづさはりましたのは、明治三十年四月一日を初日として、博勞町稻荷座に於て妹脊山が出ました時、私は掛合の雛鳥と姫戻りを勤めました。此時の吉野山は脊山の大判事が組太夫、久我之助が越太夫、糸が源六（後の仙左衞門から三代目團平になつた人）妹山の定高が大隅、雛鳥が私（伊達）、糸が團平、四段目は姫戻りが私と友松（今の道八）、切の竹雀が大隅太夫と團平といふ顔觸れでありました。何しろ大隅師があの聲で、美音でなければ勝手のわるい竹雀を語つたのでありますから、世間は好奇心を以て之を迎へ、隨分盛んな人氣をよんだのであります。

夫から後、私はいつも雛鳥を引受け竹、雀も度々勤めました。堀江座を經て御靈文樂座に這入つてのちの事は、皆様のお耳に新しいから茲には申しませんが、近頃は先輩が次ぎ〳〵に凋落して、今では私が後輩に廻はらねばならぬやうになりました。眞に感慨無量であります。二見の師匠の竹雀は、眞に古今の逸品でありましたから、中々眞似が出來ませんが、私は其氣品を學ばんことを心がけ、それに大隅師の型や自己の工夫やらを取交ぜて、一派の風格を作つてゐるつもりですが、どうも我ながら慊らぬ所があつて困ります。（完）

小唄　**與作**　二上り

〽與作おもへば、照る日もくもる、はい〳〵どう〳〵
はい〳〵、關の小萬が涙の雨よ、ほとゝぎす、アレナ
ほぞんかけたかえ、こちや二世かけたえ。